

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	ビジネスデザイン研究科	ビジネスデザイン専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	ビジネスデザイン研究科・教授	亀川雅人 印	
自然・人文の別	自然 ・ (人文)	個人・共同の別	(個人) ・ 共同 名
研究課題名	CSR（企業の社会的責任）の概念構想に関する一考察		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	立教大学ビジネスデザイン研究科 博士後期課程 2年	栗屋仁美 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2007年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

企業という営利組織がその活動を正当性、ないしは正統性をもって社会から受け入れてもらうためには、企業活動の思想・政策・戦略を社会に明示し、その役割と責任を明確にし、果たすことが求められよう。CSRとは Corporate Social Responsibility の略であり、企業の社会的責任と通常訳されている。本研究は、社会の中に存在する企業に求められている役割や責任とは何か、企業とは何かということを追求めたものである。これまで議論されてきたCSR議論をまとめ、現代のCSR動向を分析し、CSRについての構想概念をマクロ的に研究する序となるものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[CSR] [費用] [権力と責任]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

企業の社会的責任についての是非の議論は、1950年代より継続して行われ、現在ではCSRと呼称されている。CSRは、社会環境の変化に対応し、社会と企業の関係性を問うものである。その本質は流行に左右されるものではない。社会全体社会背景の変化に伴い、過去にも企業の責任が社会的話題になった時代は幾度かある。最近では、2003年にCSR元年といわれ、2005年前後にCSRの大々的な関連調査があらゆる機関で行われるなどし、CSRバブルと揶揄されたりもした。2008年の現在でも、企業は継続してCSR報告書を発行してはいるが、以前のような盛り上がりは沈静したように思える。企業の責任の議論にこのような流行があつてよいのか、はなはだ疑問である。企業不祥事も後を絶たない。本研究は、CSRの社会的意義を解明する緒として、その概念に対する理論や影響を与える考え方を見直すことを目的とする。

この1年の成果として大きく、2つのことがあげられる。企業の社会的責任否定論に関する研究と、権力と責任均衡論に関する研究である。以下、順に述べる。

【企業の社会的責任否定論に関する研究】

企業の社会的責任否定論の存在と肯定論の反駁の議論がもたらした意義は大きいことは間違いない。ただ否定論と肯定論の議論には、「責任」、「利潤」と「費用」、「主権」の解釈のギャップが存在することを導き出した。また、フリードマンが働かないといった見えざる手を働かせる土壌がCSRではないか、と新たな仮説を立てた。CSRは、企業の経営理念や経営姿勢と関係させて、企業活動の規範論として企業の目線から論じられることがままある。本稿ではCSRを社会の一つの枠組として捉え、議論している。つまり、CSRには社会からと、企業からと2つの視点が存在する。

社会からの視点では、CSRは見えざる手を働かせる土壌である。見えざる手とは、公私益の自然的調和をもたらす経済機構であり、企業権力を制御する。

企業からの視点ではCSRは、社会に対する費用である。企業規模の拡大と、ステークホルダーの存在により、企業にとってCSRは避けて通れない現代の不文律がある。不祥事などに代表される市場の失敗は、これまでは公的に補完されてきた。小さな政府の方向に向かう今、公的のみでは不十分である。市場の失敗が市場化に向かうとすれば、企業は公的費用を私的費用でまかなうことになり、企業自らの枠組みが求められる。そこには超えなければならないハードルもある。社会性と経済性のバランスの判断が困難であるため、経営者の能力が厳しく問われるであろう。CSRが企業の経済業績に優位に働く実証がなされていないことより、業績を短絡的に考える経営者であれば、公的費用を私的費用でまかなうことを避けようとしてしまうであろう。また権力と責任の均衡理論を是とするならば、負える責任の限界をどこにもってくるかの判断も困難である。

1950年代から議論された企業の社会的責任論は、普遍的な課題を抱えたまま現在に到っている。人により相違する企業観や市場と企業の摩擦、もっといえば存在する可能性のある市場の欠陥など、一概には論じられない要因がある。学際的に多面的に言及されるCSR論は半永久的に継続するであろう。

今後は、フリードマンも認めるCSR領域をいまだ企業が遂行できない点について、市場の失敗に対しての企業対応と社会的費用の関係性より考察を深めたい。また、権力と責任の均衡を包含したコーポレートガバナンスを社会の中の企業の視点より考えることが求められよう。変化する資本主義社会における見えざる手とCSRの関係性についての体系的な把握も求められよう。

【権力と責任均衡論に関する研究】

社会と企業の関係を言及するに、企業の権力と責任に焦点をあてた。その際、デヴィスの「企業の権力と責任の均衡理論」を是として議論をすすめてきた。もちろん、この理論そのものの是非を問う疑問もあろうが、企業に、特に大企業に強大な権力が存在することは周知の事実より、この理論を是とし考察を加えてきた。以下のことが導き出された。

デヴィスの理論に拠れば、CSR 概念が普及するまでは、企業の権力と責任の均衡は、量的には等しかったであろうが、企業の保有する権力の領域と、負う責任の領域が一致していなかったケースもありうる。この不一致の一部が市場の失敗につながったといえる。

現代の CSR 概念は、企業の権力と責任の均衡に、質的な影響を与え、権力と、責任の領域の一致化をもたらせつつある。つまり、公的に賄われてきた社会的費用を、企業が私的費用として取り込む制度に変換しつつある。ジャコビの主張する、社会的圧力と企業行動の照応の意と等しいであろう。このことより、責任として社会から要請されている 2000 年代の CSR 概念は、企業の権力と責任の作用・反作用に影響を与え、費用概念を変革しているといえる。

収入を生み出すためには、当期費用、未来費用、社会的諸費用の回収が必須である。未来費用の一部と社会的諸費用が、CSR 活動費用と等しいと大まかに把握すれば、それと照応する権力は、収入そして、収入と費用の差額の利潤にも関与している。企業は利潤拡大のためにも、効率的な費用の回収を行うことが求められている。本研究により、CSR 概念は、企業の権力と責任の領域の不一致を一致化させる、そして、市場の失敗のコスト概念の変革を行っていることが導き出された。CSR 概念は新たな社会的価値を創造する発展途上にあるといえよう。

本研究の、権力と責任に関する言及においては、企業と社会を対立した物として捉えてきた。その方法論とは別に、企業は社会を構成する一部であるという考え方も重要であることも留意したい。また、権力は企業のみにあるのではなく、ステークホルダーにも違った形の権力があるともいえる。

とりこぼした課題を以下に述べる。新たな社会的価値の変化を体系的にとらえるために市場の失敗(社会的費用)から CSR への変遷について、考察が不十分である。また、権力と責任の均衡について言及しつつも、企業の責任の限界まで考察できていない。例えば、責任が権力に均衡するなら、どこまでおえばよいのか、不祥事などと絡めての限界論に言及できていない。今後の課題にしたい。

【その他】

今現在、継続して研究しているのが、社会的費用と株式会社制度との関係である。社会的費用を私的費用として企業内に取り込む際に、株主有限責任制度がどのように関係してくるのかを考察している。CSR とは、経済学的概念の市場の失敗であることより、経済学的なアプローチも含め言及したく考えている。

また、企業をみる視点が、資本主義社会の 1 機能としての企業を見る視点と、利潤追求が目的の企業を主体にしてみる視点があることにも留意し、資本主義社会についての研究も鋭意すすめていることを報告する。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

以下4件とも掲載予定

- 1) 紀要『立教ビジネスデザイン研究』第5号 (2008年4月初投稿)
「CSR概念に関しての一考察」
- 2) 日本経営教育学会機関誌 (2008年1月末投稿)
「社会的責任否定論からみた現代のCSRにおける課題」
- 3) 経営ディスクロージャー研究 (2008年1月末投稿)
「企業の権力と責任に関する変化の一考察」
- 4) 比治山大学短期大学部紀要 (2007年10月投稿、2008年3月掲載予定)
「欧米との比較にみる日本企業の社会性の一考察」

② 図書

特になし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

特になし

④ その他

以下2件、学会報告

- 1) 日本経営教育学会 第56回全国研究大会 自由論題報告 (2007年11月24日)
「社会的責任否定論からみた現代のCSRにおける課題」
- 2) 日本経営ディスクロージャー学会 第9回 自由論題報告 (2008年1月5日)
「株式会社の権力と責任に関する変化の一考察」

以上